

「入浴実習」における授業内容の一考察

兵庫県立女子高等技術専門学院 介護福祉科 松尾 充子

1. はじめに

当学科は、平成3年に開設され、6期にわたる卒業生を送り出してきた。2年間の訓練を行い、介護福祉士を養成する訓練科である。介護福祉士とは、社会福祉士および介護福祉士法第2条において、「介護福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって…(中略)…入浴・排せつ・食事その他の介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行うことをその業とする者」とうたわれている。よって、介護福祉士は、理論にとどまることなく、実際に動くことのできる、また、手を出すことができる人材でなければならない。

しかし、現在の学生の受動的傾向は、当学院だけが抱えている問題ではないであろう。ともすれば、教える側から教えられる側への一方通行の授業になりがちである。そのような授業では、学生のなかで学んだ内容が展開され、膨らんでいくことは、期待できない。さらにそのような方法で身についた技術では、教科書どおりにはいかなない現実に対応することは困難であり、結果、個別性の要求される対人援助としての介護技術には、成り得ない。

厚生省より、新ゴールドプランが発表される等、福祉人材養成の必要性は言うまでもないが、現在の社会が必要としているのは、質の高い介護福祉士である。介護福祉士の質の向上のためには、与えられたことに満足することなく、常に新しいものを求め、吸収し、消化していこうとする専門性が不可欠であ

り、その重要性は、学生の時代に身につけておくべきであろう。

学生たちが受け身ではなく、自分で考え学ぼうとする姿勢を養うことにつながるような授業はできないかと、入浴介護実習の授業をとおして取り組んでみたので報告する。

2. 入浴実習の位置づけ

人間の日常生活行為は、食事・排泄・清潔に大別される。当学院では、「清潔」の項目に34時間の授業を組み、そのうち入浴について10時間の授業を当てている。

本来、入浴には、一般浴・機械浴・部分浴(シャワー浴)等がある。部分浴(シャワー浴)については、授業時間数の都合もあり、講義および介助具の説明で補うこととし、実習は行っていない。また、当学院の入浴実習室は図1のとおりであり、家庭用浴槽が2槽設置されているが、それについては、施設介護実習第1段階終了後に対応することとして、とりあえず、この段階での入浴実習は機械浴で行うこととした。

10時間の使い方は、次のとおりである。

2時間	入浴の目的
2時間	手順説明・計画表作成
4時間	実習
2時間	まとめ(反省)

この10時間は、「清潔」の項目の最後に行うので、学生はすでに清潔の意義、皮膚の生理、あるいは清

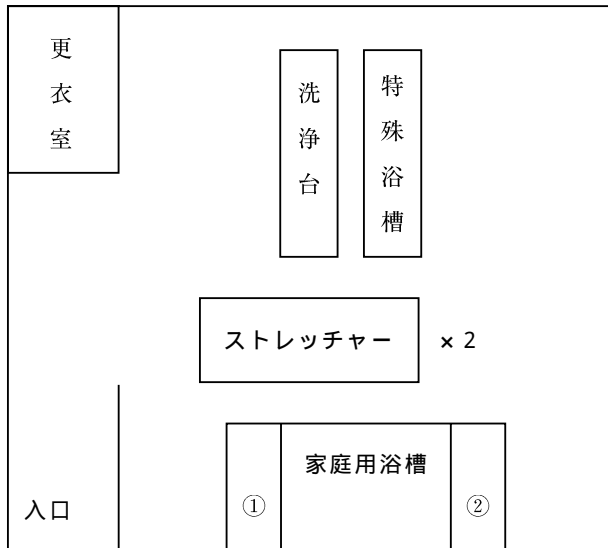


図1 入浴実習室

拭・洗髪についての学習を終えている。また、この後に施設介護実習第1段階がひかえていることもあり、入浴介助の実習は、事実上、介護技術の総仕上げとして位置づけられる。

また「入浴」という生活行為は、何気なく、ほとんど毎日習慣的に行われている行為であるにもかかわらず、観察はもとより、衣服の着脱・移動・入浴介助といった多くの重要な要素を含む行為である。われわれ指導員側からしても、学生が施設実習に出るレベルに達しているかどうかを判断する目安として、大きな意味を持つものである。

3. 入浴の目的

私たちは、なぜお風呂に入るのだろうか。

五体満足で、これまで特に不自由も感じることなく入浴してきた学生たちにとっては、考えたことのない問題である。

学生の口からは、身体の清潔のため、疲れをとるため、身体を温めるため、といった意見が出された。しかし入浴の目的は、それだけではないはずである。日本人は、夏はほぼ90%の人が、冬でも60%近くの

人が毎日入浴しているというデータもあり、他に例をみないほど風呂好きである。湯舟につかる習慣を持っていることに代表されるように、ほとんどの人が、入浴に対しかなり強い欲求を持っているといえる。それゆえに、利用者にとって「入浴」という行為は特別なものではなく、むしろ当然なものとして理解されなければならない。

介護福祉士の業務は、日常生活の援助である。たとえ、人の手による介助が必要になったとしても、その「入浴」を、私たちが何気なく行っている入浴と同じ日常生活の一部として位置づけ、その視点からとらえる必要がある。介護福祉士に要求されるのは、なぜ介助するのかではなく、人はなぜお風呂に入るのか、入りたいのか、を考える気持ちではないだろうか。

学生を5グループ(1グループ5～6名)に分け意見を出し合い、話し合った結果、次のようにまとめられた。

身体を清潔にし、爽快感を得る。

身体を温め、血液の循環を促進する。

皮脂の分泌をよくし、美容効果を促進する。

関節や筋肉の緊張をほぐし、痛みや肩こりを緩和する。

心理的なリラックス効果を与える。

このように考える時間を持つことで、介護技術というより、むしろ日常生活援助としての入浴介助という基盤作りができたのではないかと考える。そのうえで、学生が、目の前の利用者にとってのお風呂の意味が考えられるようになれば、少しでも気持ち良くお風呂に入れてあげたいという思いにつながるのではないだろうか。

4. 計画表の作成

入浴実習は、1グループ5～6名で5グループを編成する。各グループ構成員の役割は次のとおりである。

リーダー 1名
(タイムキーパー)

介助者 洗い係 2名
更衣・移動係 2名

利用者 1名

(5名のグループは介助者がリーダーを兼ねる)

各学生の役割分担を明確にしたうえで、図2の計画表を各グループ1枚作成する。この計画表については、これまでもベッドメイキング・食事介助・清拭のときに記入の経験をしている。記入の目的として、

使用物品を列記することで、全体の流れを考
えることができるようになる。また、その必要
性がわかる。

番号		氏名	
課題		対象者	
目的		使用物品	
時間	手 順	留 意 事 項	

図2 計画表

手順を理解する。

留意事項を確認することで、自分の行動を広い視野でとらえることができるようになる。

以上の3点があげられる。記入にあたり、学生に対しては、あらゆる場面において、(A)利用者、(B)介護者、(C)環境の3方向から考え、評価するように指導してきた。初回のベッドメイキング時の計画表作成からすると、回を重ねるごとに、少しずつではあるが、読みやすく、要領の得たものに近づいてきている。ただし、学生からすると、作成には時間が必要なようで、授業時間内では完成できず、課題となっているのが現状である。

今回の実習では、80歳女性歩行不能(寝たきり)の対象者を想定し、ベッド上で脱衣後ストレッチャーで移動、機械浴で入浴、そして着衣までの過程を30分で行うこととした。

実際に入浴実習室で実習を行うのは、1グループであるから、残りの4グループについては、隣の介護実習室で、計画のチェックやこれまでの復習に時間を使うことになる。したがって、入浴を担当する指導員とは異なる介護系指導員が残り4グループの授業を担当しなければならない。

5. 入浴実習の実際

計画を立てたうえで臨むのではあるが、30分という時間は、学生にとって短いようである。これまで食事、あるいは洗髪というように、単独での介助行為にしか取り組んだことのない学生には、入浴するために必要な一連の流れのなかで動くという経験は初めてのことであり、あらためて自分の未熟さを痛感することになった。例えば、入浴するためには、浴槽にお湯をはる必要があることに、初めて気づく学生も多い。

学生たちは、1つの目的を達成するために、いろいろな要素が関係し合い、それらすべてに対応していかなければならない現実を学ぶことができる。か

つ、計画表どおりに進まないなかで、状況判断の大切さと、今自分がしなければならないことを意識するようになる。さらに、合理性の追求に目が向くようになっていけばと期待する。

理想的には、学生全員が利用者役を体験できるようにしたいのであるが、実際に入浴実習として使用できる時間が4時間ということで、学生が経験できるのは、各グループ1回のみの実習である。よって学生は、自分の役割以外は経験できない。したがって、自分の役割からみた入浴について意見をまとめ、他のメンバーにしっかり伝えることが要求される。しかしそうすることが、逆に、自分の役割に真剣に取り組むという結果を生んでいると思う。その作業に実習終了後の2時間を「まとめ」として当てた。

前述したとおり、入浴実習は介護技術の総仕上げとして、また個々の学生が施設へ実習に出ることができるレベルに達しているかどうかを判断する機会としても位置づけている。しかし、役割分担を決める際、指導者側から意図的なかわりはしておらず、あくまでも学生の話し合いによるもので、適材適所という結果でない場合もある。また、役割によって学生の負担も異なってくる。その意味では、評価に矛盾が生じる。そのために、「まとめ」の時間を利用して、計画表の修正と各自レポートの提出を課した。レポートでは、入浴実習を経験しての感想と、学んだことをまとめることとした。補充できているかどうか、確認するためである。特に、合格レベルに達していないと予想される学生については、この時点での指導がポイントとなる。

6. おわりに

現在のわが国は、物質的にも経済的にも豊かになり、人々はQOL（生活の質）を追求する時代になった。しかし、日常生活は、衣食住などの行為によって生理的な要求が満たされ、生命の維持が保障されることが前提条件とされる。そのような基礎的部

分が確立されてこそ、生活行動が維持・拡大でき、QOLの追求につながるのである。

介護を必要とする人は、日常生活の自立が困難な人だけに、身の回りの世話、いわゆる生命の維持に直接つながる生活行動への援助を必要とする人である。それだけに、毎日の継続した援助が必要であり、一方で、その人のQOLがどう追求されるか、介護者にゆだねられる部分大きい。

私は、学生たちに、このことをよくわかってほしいと思う。入浴とは、単にお風呂に入るのではなく、「人間」が、気持ち良くお風呂に入ることなのである。そうなるために、いろいろ工夫し、考え、努力を惜しまない介護福祉士になってほしいと願う。

幸いに、当学院の学生のほとんどは、福祉職に最も必要とされる「人」に対しての感情を持てる学生である（例外的に1学年に1名程度、感情を伝えることのできない学生が存在することがある）。よって、今、学生たちに必要なのは、自らが試行錯誤する姿勢ではないだろうか。単に、手順を覚えるために授業を受けるのではなく、利用者のために試行錯誤することが、介護福祉士の本来の姿であると、学生に伝えたい。利用者のために試行錯誤することの大切さ、おもしろさをわかってほしいと思う。

参考文献

- 1) 花王生活科学研究所：「清潔な暮らしの科学（清潔編）」、1994。
- 2) 全国社会福祉協議会：「自立に向けた介護展開手順の手引き」、1998。
- 3) 藤岡信勝：「授業づくりの発想」、日本書籍、1993。
- 4) 松平 誠：「入浴の解体新書」、小学館、1997。